

【4】 考察と今後の課題

1. 研究の考察

高等部では「生活を楽しむ子」を目指して話し合いや実践を重ね、「生活を楽しむ」将来像を探りながら、個別の指導計画との関連を探り、研究を深めていった。「生活を楽しむ」という言葉は幅広い意味があり、多様な捉え方がある。教師一人ひとりの考えを出し合うことによって、お互いの思いを知り合い、共通理解しながら、一步一步研究を進めていった。

研究のサブテーマである「個別の指導計画をもとにした授業づくり」に対しては、高等部でも授業実践を繰り返しながらも解決の糸口がなかなか見つからず、苦労したテーマでもあった。しかし、個別の指導計画を作成していく中で、自然と個人個人の教育的ニーズが見えだし、次第にそれを授業の中に盛り込んでいくことによって授業とのつながりを捉えることが少しできるようになってきたように思う。個別の指導計画について形式、書き方等について論議を重ねていった。しかし、授業実践をしていく中で、個別の指導計画を作成することよりも、個人個人に視点を当て、その生徒がどういう生活を今まで送ってきたか、そしてこれからどのような卒業後の生活をおくっていくか、を大切にしていきたいという確認をした。そのためにも個別の指導計画の作成、活用のプロセスをこれからも研究を深め、よりよいものにしていきたいと考えている。そういった意味で前回の「題材の選定と支援の工夫」につながる今回の研究は貴重な実践であったと感じる。

2. 今後の課題

前回に続く今回の研究を通して、確かに教師の姿勢が変化し、主体的に行動しようとする生徒も増えてきたように感じる。しかし、課題も多く残された。

(1) 支援の工夫について

生活マップ、保護者アンケート、自分づくりの段階表、医療機関との連携等を通して、個々の教育的ニーズをある程度把握することができた反面、授業の中で情報を生かし、個人への支援の方法を幅広く工夫できたかどうかは大きな課題として残っている。支援の方法について話し合った上での授業実践ができなかったため、今後も検討を続けていきたいと考えている。

(2) 保護者との連携について

高等部では、保護者に対して個別の指導計画の目標のみの提示を行った。保護者との連携の必要性を考える上で、個別の指導計画を公開しての話し合いはとても貴重である。今後は保護者に個別の指導計画についての理解を啓発していくとともに、個別の指導計画のあり方について検討していきたいと考えている。

(3) 評価について

評価についての話し合いが中途になってしまったことも課題にあげられる。生徒たちの様子を授業等を通してどう捉えていくか、また、教師の支援に対してどう評価していくのか、これも大切な課題である。

(西尾敏枝)